

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02140

研究課題名(和文) フランスにおける非正規滞在移民女性の正規化運動と生活世界の論理

研究課題名(英文) Social Movement of Undocumented Migrant Women in France

研究代表者

稲葉 奈々子 (INABA, NANAOKO)

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：40302335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：非正規移民は、公共の場で声をあげてもなきものにされてしまう。本研究はフランスにおける移民女性がそれにもかかわらず2000年代以降、正規化運動に参加し、在留資格の取得に成功した理由を明らかにするものである。移民女性を担い手とする運動の理論的支柱はアメリカで発展したブラック・フェミニズムである。しかし運動を成功に導いた要因は、労働運動が運動を牽引したことであり、家事労働や介護労働がおもな職場である非正規移民女性は、労働運動に直接参加することはできていなかった。非正規移民女性は、「生きるために他に選択肢がない」という「生」そのものが運動に参加する論理となっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国人の権利については、アイデンティティ・ポリティクスなど自由権と、労働や社会保障への権利など社会権については分けて考えられる傾向があるが、フレイザーとホネットの論争が示すように、両者の関係は切り離すことができない。社会的な生として存在するだけでなく、政治的な生として存在していなければ、そもそも社会的領域における再分配の対象からも排除されてしまう。再分配をめぐる学術的な議論が、社会的排除を経験する当事者たる移民女性のリアリティから出発するならば、まずは社会的な生として社会統合されていることが、政治的存在として公共圏で声を発する前提になることは明らかである。

研究成果の概要(英文)：Undocumented migrants are ignored when they raise their voices in public sphere. This study seeks to identify the reasons why undocumented migrant women in France have nevertheless participated in the regularization movement and succeeded in obtaining residency status since the 2000s. The theoretical pillar of the movements of migrant women is black feminism, which developed in the United States. However, the factor that led to the success of the movement was that the labor movement led the movement, and undocumented migrant women, whose main workplaces were domestic work and care work, were not able to participate directly in the labor movement. For undocumented immigrant women, "life" itself was the logic for joining the movement, as they had no choice but to join the movement in order to survive.

研究分野：社会学

キーワード：移民 ジェンダー 社会運動 承認 再分配 アイデンティティポリティクス

1. 研究開始当初の背景

フランスでは 2006 年以降、非正規滞在移民（以下サンパピエ）が在留資格の正規化を求めて職場を占拠する社会運動が活性化している。2006 年にサンパピエ労働者の当事者を担い手として生じた運動は、その後、労働組合の支援により正規化に成功している。それ以降、職場占拠を手段とした、正規化要求運動の波は断続的に起きており、2024 年現在も続いている。

そもそも、フランスにおける正規化要求運動は、移民労働者の受け入れが停止された 1974 年前後から、存在してきた。正規化措置は、1973 年、1979 年、1981 年、1991 年、1997 年に実施されている。1981 年、1997 年にはそれぞれ 13 万人と 6 万人が正規化されるなど、社会党への政権交代による政治的機会が開かれたときには、大規模な正規化が行われており、運動は成功を収めてきた。

2. 研究の目的

本研究は、サンパピエの運動を歴史的に網羅的に把握するとともに、そのなかでとくにサンパピエの女性の役割に注目して、運動が成功した理由を明らかにすることを目的としていた。

彼女たちの運動が成功したのは、言語化された主張を手段とする運動だけによるものではない。社会運動として把握しうる、公共圏における主張や行為は氷山の一角である。水面下には、いまだ言語化されていない生活世界のリアリティが存在し、そこで共通の経験を媒介することで形成された、フランス人支援者との認識の共有があったと考えられる。つまり、生活世界においては、彼女たちは「非正規滞在者」としては存在していない。子どもを介してつながる母親であったり、職場の同僚であったり、フランス人支援者にとっては、自分の子どものシッターだったり、親のケアワーカーだったりする。つまり、このような関係において形成される生活世界では、在留資格による選別の論理は働いていない。

彼女たちが正規化運動のためにストライキを行ったり、職場占拠をすることで、正規の在留資格を持つ移民労働者やフランス人支援者は、彼女たちが国外追放の対象であることを知る。いわば国家主導の排外主義的な移民政策は、生活世界の論理を否定する。

さらに、生活世界の植民地化への抵抗が、非正規滞在の移民女性の社会運動として現れると、生活世界では不可視化されていた植民地主義や家父長制の問題にフランス人支援者は直面させられる。このことは、移民女性の運動を支援するフランスの女性運動がポストコロニアルな展開を遂げる契機になったと考えられる。

本研究ではまず、国家による生活世界の植民地化の概念を用いることで、フランス人が非正規滞在の移民女性の運動を支援する動機を、単なる人権擁護や人道主義に還元せず、生活世界での経験の共有から把握する。さらには非正規滞在の移民女性の運動を対象とすることで、ナショナルな枠組みでは認識できなかった植民地主義的家父長主義が生活世界を支えている事実が指摘されたときに、ホスト社会のマジョリティの女性運動が、その問題にいかに対峙するのかまで検討する。このように、非正規滞在移民の運動を、在留資格の正規化という当事者にとっての成功がいかになされたのかを明らかにするのみならず、生活世界の論理がグローバルな観点からどのような変化を迫られているのかまで射程に入れて検討する。

3. 研究の方法

2006 年にはじまり、2017～2019 年に 3 回目の大きな波を迎えたサンパピエの移民女性の社会運動について、具体的には、パリのホテル清掃労働などの現場でストライキを行って正規化を求めたサンパピエの移民女性および、支援者であるフランスのフェミニスト団体および労働組合のメンバーを対象とした。調査では、一次資料を収集するとと

もに、対象者にインタビューを行った。サンパピエの移民女性については、ライフストーリー・インタビューを行い、正規化運動の舞台となった職場と労働についてだけでなく、地域社会や子どもの学校を介して構築された社会関係についても聞き取ることで、グローバル化のなかに埋め込まれながらも、ナショナルな枠組みが自明視されている生活世界の論理とその矛盾を明らかにした。さらに、国家による生活世界の植民地化に対して、どのような抵抗運動が生じたのかを検討するだけでなく、生活世界そのものの矛盾に直面したときに、それがどのように乗り越えられたのかも、支援者に対するインタビューも行った。

4. 研究成果

本研究は、フランスで 2000 年代以降に活性化するようになった非正規雇用労働者の労働運動や公営住宅への入居を求める住宅への権利運動の担い手のうち、移民女性に対するインタビュー調査を行うことで、社会運動における「分配か承認か」という古典的な問題に、ポストコロニアルな観点からアプローチし、底辺労働に従事する移民女性たちにとっての社会的公正を明らかにした。

調査対象とした社会運動は、非正規滞在移民の正規化を求める運動を除いては、いずれも移民を主要な担い手としているが、「移民の権利」として、特殊性に訴えることなく、「すべての人」を掲げる普遍的な運動として展開している。

しかし、その一方で、これら普遍的な価値観に訴えて社会的排除に抗する運動の担い手が、移民女性を担い手とするポストコロニアルなフェミニズム運動に共感して、ラディカルな運動を展開している。

ここで問題になるのは、担い手の女性たちが、度合の濃淡はあるが、イスラム教の実践であるスカーフ着用をアイデンティティ・ポリティクスとして実践していると考えられる。実際には、移民女性たちの運動の重点は「分配」にある。しかし、分配に関して訴える公共空間において、誰に発言の機会が与えられるか、誰の発言が政治的重要性を持つかというポリティクスにおいては、スカーフをつけた女性は政治的には存在しないかのごとく扱われてしまう。このような力関係への異議申し立てが、ポストコロニアルなフェミニズムとして現れたといえる。

これらの運動は同じエスニック・コミュニティの男性による女性差別だけでなく、フランス人による植民地主義的な家父長制に対しても異議を申し立てるものとして展開していることが明らかになった。

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策の影響で海外渡航が認められず、フランスにおいて社会調査を実施できなかった。そのため、関連文献を網羅的に読み研究動向をレビューし、概念枠組みの検討を行った。その成果として、貧困層であるエスニック・マイノリティ女性が担い手となる社会運動について、日本社会学会で報告した。そもそも貧困層の女性を社会運動の主体として想定しうるのかが研究上では論争になっている。その上エスニック・マイノリティの女性については、政治的に存在することもホスト社会のマジョリティから正統性を認められないこともあり、政治参加にあたって制度的な障壁があることも事実である。貧困層のエスニック・マイノリティ女性については、研究者がロマンチックに理想化した主体性（エージェンシー）を発揮する行為者として分析するか、その逆に、構造的な力関係の制約を強調することで、受け身の存在として描くかの両極端に別れる傾向があった。本研究は、そのどちらの轍をも踏まず、主体と構造の両方を考慮するポストコロニアルなアプローチを、実証研究に使える概念として鍛え直すべく理論的検討を行った。

また、フランスの事例を相対化すべく、日本の非正規滞在移民の生活困窮をめぐる社会運動について、インタビュー調査を 33 件実施することができた。また再配分をめぐる日本の反貧困運動の参与観察を行い、エスニック・マイノリティが主体的に運動の担い手となるプロセスを調査した。とくに入管収容所のなかでハンガーストライキによる抗議行動を行ったのちに仮放免となった個人についてアガンベンの「ホモ・サケル」の概念を用いて分析を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 33
2. 論文標題 書評：山崎晶子『現代フランスのエリート形成 言語資本と階層移動』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日仏学会	6. 最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 143
2. 論文標題 コロナ禍の外国人労働者と貧困	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 73-1
2. 論文標題 書評：現代日本の宗教と多文化共生	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 61-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 INABA Nanako	4. 巻 32
2. 論文標題 Migrant Women from North and Sub-Saharan Africa Participating in a Social Movement for the Right to Housing in France	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 SIAS Working Paper Series: Public Space, Public Sphere and Publicness in the Middle East: Proceedings of International Seminar held at Cairo, Egypt	6. 最初と最後の頁 179-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 49-4
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染拡大と非正規移民の子どもの社会的排除	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 168-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 12
2. 論文標題 「自助」奪われた非正規滞在外国人 支えは共感、その可能性と限界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journalism	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 INABA Nanako	4. 巻 32
2. 論文標題 Migrant Women from North and Sub-Saharan Africa Participating in a Social Movement for the Right to Housing in France	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 SIAS Working Paper Series: Public Sphere, Public Space and Publicness in the Middle East	6. 最初と最後の頁 179-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 61-4
2. 論文標題 書評: 『国際移動と親密圏 ケア・結婚・セックス』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア経済	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24765/ajikeizai.61.4_52	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 992
2. 論文標題 企業依存社会の歪み 「居場所づくり」を超えて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 労働情報	6. 最初と最後の頁 12-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 人権と部落問題	4. 巻 74
2. 論文標題 コロナ禍で困窮する外国人と反貧困運動による社会への包摂	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人権と部落問題	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 INABA Nanako
2. 発表標題 Radical Left Movements as Infrastructure for Anti-Poverty Movements and Creation of Alternative Spaces in Japan
3. 学会等名 The 10th East Asian Regional Conference in Alternative Geography (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 INABA Nanako
2. 発表標題 Resistance of Detainees and Colonialist Rule in Immigration Detention Centers
3. 学会等名 IMISCOE SPRING CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 INABA Nanako
2. 発表標題 La greve de la faim des Sans-papiers au Japon
3. 学会等名 Identie Migrants, Definitions, Representqtions et luttes internes
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 INABA Nanako
2. 発表標題 Long spring of migration in Japan: Why was the new Immigration Act of 2021 scrapped?
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 エージェンシー理論の唯物論的再検討
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 INABA Nanako
2. 発表標題 Resistance of Undocumented Migrants in Immigration Detention Centers in Japan
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 樋口直人・稲葉奈々子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 232
3. 書名 ニューカマーの世代交代 日本における移民二世の時代	

1. 著者名 岸見太一, 高谷幸, 稲葉奈々子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 268
3. 書名 入管を問う : 現代日本における移民の収容と抵抗	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------